

東北風景写真家協会会員向け
会報「東風季報」第2号です。
当会報は会の行事、活動計画、
各種のお知らせ、撮影適所、テ
クニックなどの記事を掲載して
おります。

東風季報

第2号
2007年11月20日
発行
東北風景写真家協会
編集 秋葉・進藤



瀬部要三郎氏作品「晩秋の流れ」

そして更
に良い作品
作りのため
感性を磨い
て下さい。
「写真
道、近道は
無し終点も
無し」これ
が私の写真
に対するモ
ト

当協会が発足して二
年足らずで写真展開催
迄こぎつけました事
は、各顧問の先生方を
始め役員各位及び会員
皆様方のご協力に依る
ものと感謝いたしま
す。テーマである「美
しい日本」・・・何と
美しい言葉でしょう。
この美しい風景を写
真展を通して発表出来

ます事は格別の喜びと
思います。
今回は第一回目とい
う事もあって、全員出
品とまでは行きません
でしたが、出品された
会員各自の作品は個性
が表現され、誠に素晴
しい写真展と思いま
す。又、出品された方
は改めて自分の感性を
発見された事と思いま
す。

最後になりました
が、日々荒れ果てて行
く地球の中で、少なく
とも私達が住んでいる
日本はいついつ迄も
「美しい日本」として
後世に引継がれて行く
べきと念願致しており
ます。
今後の会員皆様のご
活躍とご支援を期待い
たします。

第一回写真展 「美しい日本」開催

東北風景写真家協会の第一回写真展が十一月三日(金)より十二月五日(水)迄の期間、富士フオトサロン仙台にて開催されます。平成十八年六月に設立準備委員会を立ち上げ、昨年十月十八日に総会を開催、その後約一年半で、写真展を開催することが出来ました。これも会長、顧問始め会員皆様のご協力が有って初めて実現できました。本来、会期を一回に分けて2週間開催する予定でありましたが、会場の都合で一週だけとなり、作品も一人一点となりました。又、東北風景写真家協会と言う大層な名称での初めての写真展と言ったこともあり、今回出展を遠慮された会員もおります。次回写真展は是非二週間の会期、一人二点の作品展示、全会員の出展を目指したいと思っております。

第一回写真展
「美しい日本」開催に寄せて
鈴木 登会長ご挨拶

撮影テクニック

冬を撮る

顧問 竹内 正

日本は世界に類をみない四季の彩りをもった国です。なかでも冬は凛とした空気感、雪、氷、渡り鳥等、独特の情景を醸しだしており、魅力的な被写体も豊富です。寒さに負けずにカメラを持って出掛けましょう。一人で出るのが億劫であれば、撮影ツアーに参加してみてもいいかもしれません。

雪水を撮る
雪は白、白色は (+) 補正が基本ですが、雪景色で (+) 補正をすると白く飛んでしまい白紙の様になってしまいます。陰影を活用してマイナス0.5〜1.0位が目安です。氷は半逆行の光に黒い背景を選び、雪と同様の補正をします。

太陽を入れる
冬の山では上空の空気が冷えているため、太陽に光が出やすくポイントとして活用できます。補正はマイナス1.0、絞りはF16が基準、絞ると光が鋭くなります。

降る雪を写す
雪の降るシーンは情景描写に欠かせません。激しく降る情景は長目に「ぶら」す、1/15秒。優しく降る情景には1/30秒位で「ぶれ」を少なくします。

冬の撮影の注意事項
一・白金カイロの活用
カメラバッグを地面に置くことは想像以上に冷えます。電池がドロップしてカメラが作動しなくなりま

す。バックの底に白金カイロを置き、その上にクッションを置いてカメラを入れればトラブルが防止できます。

二・電池は内ポケットに
予備の電池は肌に近いベスト等のポケットに入れて保温しておきましょう。新しい電池に交換したが作動しな

かったと言つたらトラブルが防止できます。

三・カメラは懐に
カメラを長時間三脚に載せて置くことは非常に危険です。電池がドロップしてカメラが作動しなくなりま

す。首から下げてヤッケの中に入れておき撮影直前に三脚にセットしましょう。

冬の撮影については、「百万人の写真ライフ」67号 2007年冬号「冬の情景を撮る」に小生の記事が掲載されていますのでご参照下さい。



北海道・銀泉台



ダイヤモンド富士

近畿日本ツーリスト撮影ツアーご案内

近畿日本ツーリストとの協賛撮影会を下記の通り予定しております。会員優先受付期間を設けておりますので、お早めに多数のご参加をお願い申し上げます。

記

1：富士山撮影会

ポイント：富士山上空の円を描く星空撮影
山中湖のダイヤモンド富士
忍野、本栖湖、田貫湖他撮影

実施日：平成20年2月6(水)～8日(金)
会費：47000円

2：北海道 大雪高原撮影会

ポイント：日本で一番早い紅葉の絶景撮影
銀泉台、旭岳、黒岳、羽衣の滝他
実施日：平成20年9月20日前後2泊または3泊を予定。

近畿日本ツーリストの旅行積み立て(銀行より金利が有利になっております)を希望者に適用予定、不参加の場合も多方面で使用できます。

詳細は別途お知らせいたします。
お早目のお申込をお待ち申し上げます。
連絡先：鈴木 登会長 or 竹内 正顧問

お譲りします

デジタル一眼レフカメラ・ニ
コンD100本体、バッテリーパ
ックMB-D100、ACアダプターEH-5、
Li-ION・EN-EL3リチャージャブルバッテリー 2個
(内予備1個)、CF-Card(LEXAR 1GB)1個付、
レンズシグマ28～200mm、F3.8～5.6付にて5万
円でお譲りします。。直に写せます。(進藤)

願ひ致します。

第一回写真展の開催
準備をして感じた事

十一月末からいよいよ写真展が開催されます。今回は初めての写真展という事もあって、会員七十七名に対し、出展者は五十八名で、その取り纏めに大変苦労しました。一般の写真クラブであれば月例会等があり、連絡等はスムーズに出来るのですが、当会はその有りがありませんので事務連絡が上手く行かず会員の皆様にご迷惑をお掛け致しました。
次回からはタイムテーブルを作成し、それに沿って役員、幹事、会員の皆様に積極的にご参画頂き、スムーズに全会員参加の写真展にしたいと思っております。会員皆様のご協力をお願い致します。

伊豆沼とマガン



私が伊豆沼に来るマガンの朝、夕の飛行の魅力にとり付かれて早や五年になります。初めて伊豆沼に行ったのは十二月の早朝、日の出前の沼に着くと、鈍いオレンジ色に輝く三日月が夜明けの空に浮かび、沼の水面を赤く照らしている光景に出会いました。その神秘的な雰囲気は飲み込まれそうになりながら夢中でシャッターを切りました。暫くすると数百、数千羽のマガンが沼の中央から飛び立ち始め、その迫力に一遍で伊豆沼の魅力にとり付かれまし

た。暫くすると数百、数千羽のマガンが沼の中央から飛び立ち始め、その迫力に一遍で伊豆沼の魅力にとり付かれまし

た。暫くすると数百、数千羽のマガンが沼の中央から飛び立ち始め、その迫力に一遍で伊豆沼の魅力にとり付かれまし

た。暫くすると数百、数千羽のマガンが沼の中央から飛び立ち始め、その迫力に一遍で伊豆沼の魅力にとり付かれまし



た。暫くすると数百、数千羽のマガンが沼の中央から飛び立ち始め、その迫力に一遍で伊豆沼の魅力にとり付かれまし

東側や蕪栗沼から何度にも波状攻撃の様に飛んで来たり、一斉にねぐらから飛び立ってしまい、次を期待しても全く何も無しとなったりと、今度はどんな出会いになるかと感激の毎日です。私が現地では気が付くのは彼等が飛び立つ「その時」の前に、必ず栗駒山方向から夜明け前の空に偵察隊らしき二〜三羽が風切りの羽音を立てて沼に帰ってくる、それまで静かだった群れが一斉に騒ぎ出し、群れ毎に飛び立って行くことです。

ねぐらがどこかを確認して場所を決めましょう。暗いうちに到着する時は車のヘッドライトは沼に向けないよう気をつけましょう。朝は太陽をバックに一斉に飛び立つ場面を撮影したいと思つて通うのですが、その年によつて日の出前に飛び立つてしまつたり、また太陽が高昇つても、まだ沼の中にいたり、自然現象を相手にするネイチャー・派の宿命で、いまだ満足する作品は撮れていないのが現実です。

定番中の定番、奥松島の大高森は、松島湾を一望出来る松島四大観の一つで、松島湾最大の島、宮古島の中央に位置する標高百米余りの小高い山です。松島湾を箱庭のように見られることから、壮観と呼ばれています。山頂展望台からは絶景

三六〇度のパノラマで、その雄大さに見とれることでしょう。日中の島々の風景も風情があります。我々写真家のシャッターチャンスは、日の出シーンおよびサンセットシーンであります。晩秋から早春に掛けての日の出・日の入りシーンは感動の連続であり、是非トライしてみたい。低い山ですが意外ときついので時間に余裕をもってトライ

して下さい。夕日シーン撮影後、「秋の釣瓶落し」と言うように日が暮れるのも早くなり足元が暗くなり危険度も増してきます。単独は避け複数での撮影をお薦めします。住所 東松島市宮戸 アクセス JR仙石線野蒜駅、車約一五分、徒歩約一時間三〇分〜二時間 三陸道成瀬奥松島IC 車約二〇分 駐車場 登山口に完備 トイレ 登山口に完備 頂上にはトイレなし 装備品 撮影機材一式・懐中電灯・防寒具・軽食・水 登山時間 ゆっくり二五分・普通一五分 (渡邊 善夫)

撮影地情報

朝日・夕日の絶景 奥松島大高森

撮影のポイント

朝の飛び立ち

夕方のねぐら入り

冬の森に入ってみよう

真っ白な新雪の上に行くのは、カモシカの足跡が。歩幅が広く少々深い。そして特徴のある野ウサギの足跡が林の中に消えていく。冬は、森の動物たちが活発に動き回っている様子が見え、興味深い。冬の森に入るには、スノーシューがあるとよい。私の経験では小回りが聞き意外と使い易く便利な道具である。

カメラマンにとって冬の森はなんといいっても雪と風がつくる造形美が魅力である。特に沢のあたりでは、雪坊主や氷結した流れのおもしろい形がみられる。上をみればブナの小枝に覆われた新雪が花のように美しい。足元の小さな風景もおもしろい。カラフルな秋の森から一転してモノトーンの冬景色ではあるが、森羅万象いろいろな動物

物の営みが至るところで発見できるでしょう。撮影に疲れた頃、雪をコップに詰め込んで持参のコンデンスミルクをかけて食べることもありません。冬に入る際の注意点としては、まず冬道を車で走る際は、考慮して決して無理をしないこと。必ず数人で一緒に行動すること。雪の森に入る場合にはそ

の森に詳しい人の案内が必要である。「百聞は一見に如かず」とやら、まずは億劫がらずに体験してみませんか。

船形山麓の森に関して、私がお世話になってる森の写真家・桜井洋次氏を紹介できますので(有料となりますが)、連絡してください。(佐々木 康照)



写真：こんな話、あんな話

第1話 速い安いっていい？

「はい、やすい、うまい」なんて看板、どこかで見かけませんか？街の定食屋さんか？思い出しますねエー。実は、写真屋さんでも置き換えるのとピタリあてはまるのです。技術が高く、スピーディー、そして何よりも安い、三拍子そろった店、どこかで見かけませんか？

でも、ここでちょっと考えてみましょう。われわれ、写真をこよなく愛し、感動し、更には人にこの写真の素晴らしさを見せようには、良い作品創りが大切です。せっかく、時間をかけ、重い機材を背負

「うまい、安い、うまい？」、「やはり、うまい？」、「技術が高い」を選びます。自分の作品創りに「イケチケチ精神」はやめましょう。時間と金は惜しまないことです。感動を見てもらうのは、「作品」のみで

今号の発行は秋から冬への入り口でもあり、冬の撮影術や伊豆沼、大高森、さらには冬の森などの撮影スポット紹介のご寄稿をいただきました。冬は風景写真のシーズンオフではなく、冬こそ新しい題材が見つかる時です、まずは外に出てみましょう。(秋葉 健一)

東風季報創刊号は夏の七月の発行でした。第2号は間もなくはじまる当協会の第一回の写真展にあわせてその記念号としました。写真にご興味をお持ちの方々に、日ごろの活動と作品についてご理解とご批判をいただければ幸いです。東風季報は、3月、

編集後記

(丸山 慎一)

(秋葉 健一)